

第 219 回 昭和の森自然観察会

江戸時代の人々の生活の知恵

井上智史(千葉市)

日 時：2010年3月14日(日) 13～15時 天気：快晴
参加者：28名(大人21名 子ども7名) 指導員26名
担当指導員：佐野由輝・晝間初枝・井上智史

職場の宴会でなぜか雑草を食べる芸能人の話になった。そこで私が鞆から取り出した「備荒草木図」を見せると、「えっ、井上さんも食べているのですか!?!」と…。いえ、単に勉強中なのです。

今回の観察会の前半は、食べられる雑草探し。いつ食糧難に陥っても大丈夫なように、日頃からチェックしておくことが肝要なのです。ということでまず佐野さんが日本の米・小麦・大豆の備蓄量が少ないことを示して参加者の不安を煽ることでスタート。万一飢饉になったら生き延びるためにはその辺に生えている草を食さざるをえない。そこで参加者全員で、食べられそうな野草採取に挑戦。タンポポ、ギシギシ、ナズナ、ハコベなどなどみんなが集めてきた野草を晝間さんが鑑定。掘り所としたのは江戸時代の代表的な救荒書である「備荒草木図」(農山漁村文化協会『日本農書全集 68』所収)。これは植物の精密な図と調理方法とが載っているスグレモノのハンドブック。実際の調理例も見せながらの話に、みなさん興味津々、身を乗り出して聞いていた。野に生えている状態だと食べたい気にはあまりならないのに、茹でてしまえばみなおいしそうに見えるから不思議。他に「農家心得草」という文献があり、毒草が図入りで紹介されている。これはとても重要。いくらお腹が空いても食べてはいけないものがある。江戸時代には、飢饉に備えてこういったハンドブックが庶民のために整備されていたということだ。

後半は少し話題が変わって、江戸時代の農書に見られる、スギ、カシ、クワといった樹木の利用方法や、入会地といった村レベルでの森の利用ルール、式拾番山といった藩レベルでの森の利用ルールを、歩きながらポイントポイントで紹介。おじいさんが山へ柴刈りに行くのに、背負子をしょって、腰に鉋をぶらさげていたのも、実はルールに則った装備だというのだから昔話の挿絵も侮れない。背負子だと運べる量が制限されるし、鉋だと大きな木は切れない。乱伐禁止、独り占め禁止、なのだ。これもまた生活の知恵。樹木については、スギは太い幹から葉っぱまで使い道がある(柱から線香まで)し、カシには15も長所がある(薪にしたり、櫓にしたり、どんぐり食べたり、など)。時間やコースの関係で、今回紹介できなかった”知恵”はまだまだたくさんある。普段の観察会でも折に触れて話ができるようにしておくこと良さそう。

今回は普段の観察会とは切り口が異なっていたので、観察会は初めてという人はもとより、慣れた人(含指導員)にも新鮮かつ面白かったようだ。佐野さんのアイデアの勝利。

私自身は、木々の利用方法や、森の利用ルールの説明をしたのだけれど、せっかく木々や林を目の前にしているのに、本に書かれていることの単なる紹介に近くなってしまい、工夫が足りなかったかなと反省。付焼刃的に詰め込んだ知識で人様に話をするのは抵抗を感じるけれども、こういう機会はありがたいです。仕事でも大事なテクニックだし…。そうそう、コース途中、気の早いカタクリが3輪、咲いていました。

